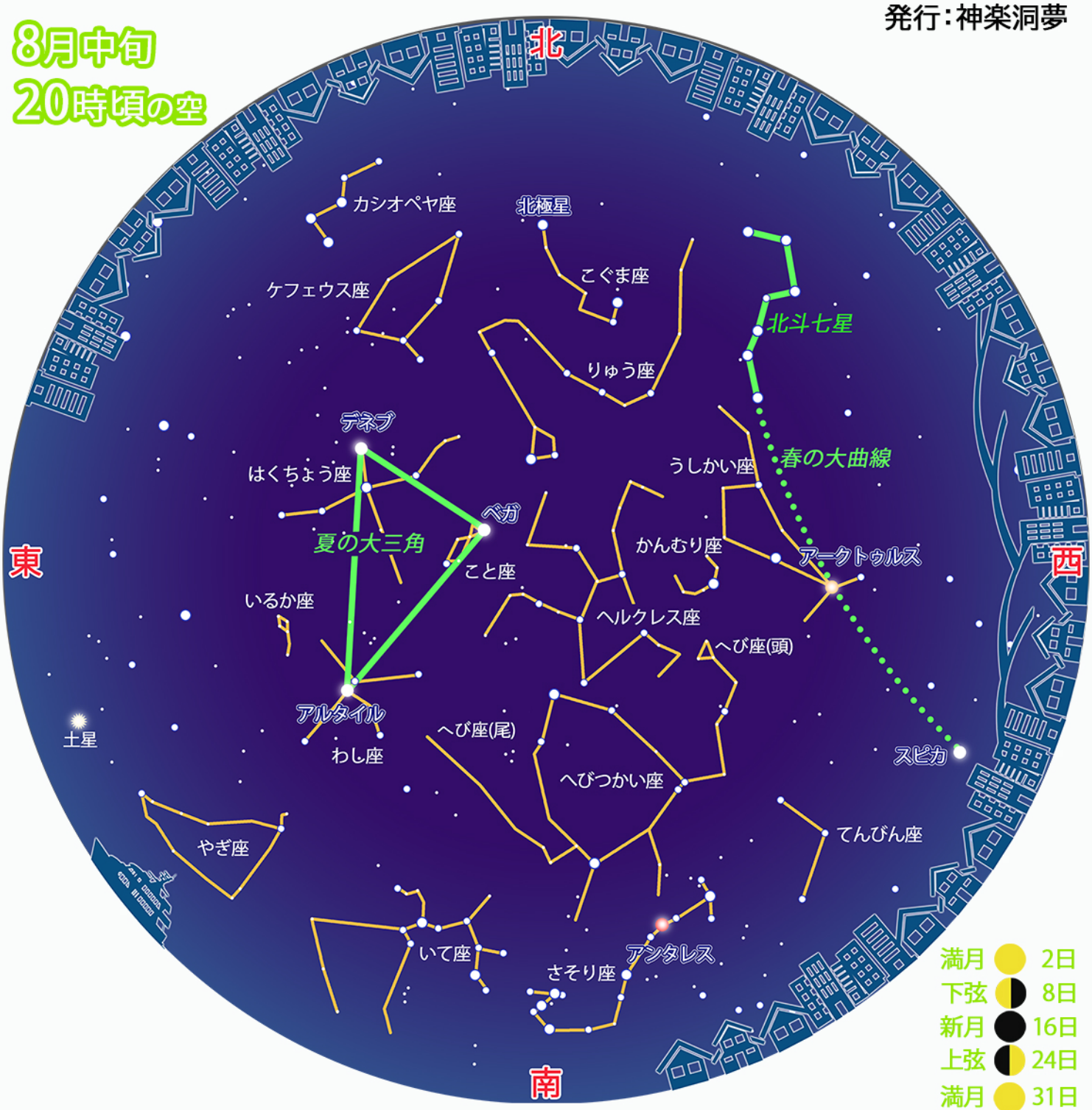
神楽通信 No.90

2023年 8月号

発行：神楽洞夢

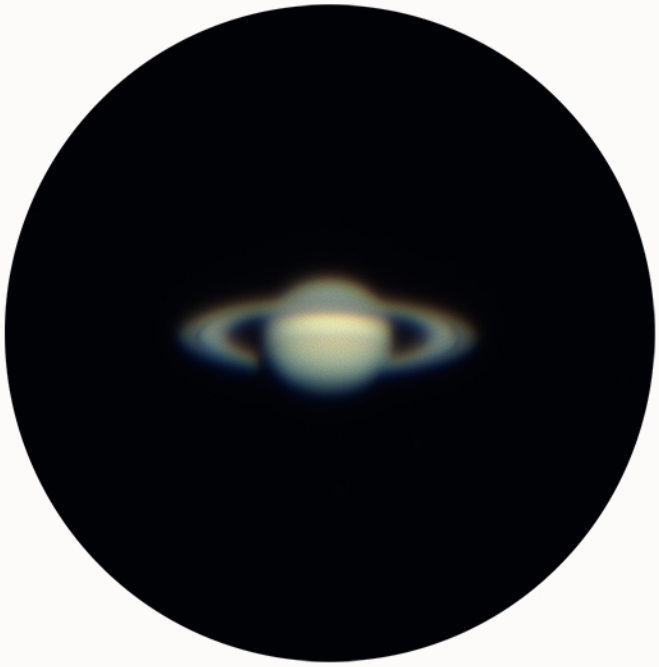


満月	2日
下弦	8日
新月	16日
上弦	24日
満月	31日

8月になると、こと座のベガ、わし座のアルタイル、はくちょう座のデネブでつくられる「夏の大三角」が空の高いところに見え、南の空の低いところには、さそり座の心臓部分を担うアンタレスが赤く輝いています。また、東の空からは土星が昇ってきており、夏の星空にも賑わいが出てきます。ペルセウス座流星群は13日から14日が見ごろとなり、月も下弦を過ぎた細い月なので、月明かりを気にせず観察できそうです。

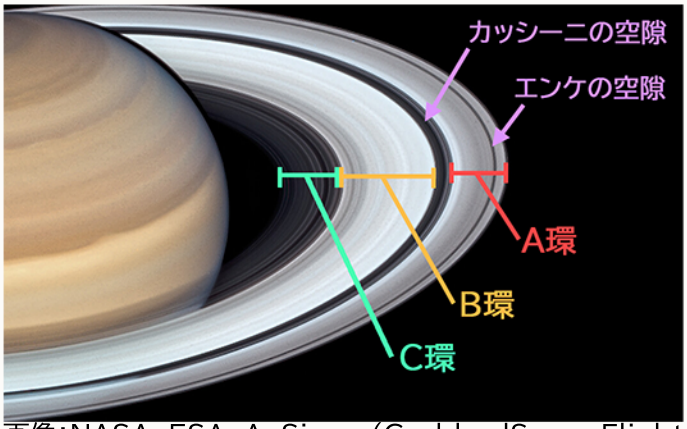
美しい環をもつ巨大な惑星　土星

8月27日に地球から見て太陽と反対側になり、観察の好機をむかえる土星。
一番の特徴は、土星の周りを囲む巨大な「環」です。実は、土星以外にも太陽系最大の惑星である木星や、天王星、海王星にも環は存在しますが、小型の望遠鏡でもはっきりと見える環を持つのは土星だけです。



昨年10月中旬に撮影した土星の様子

土星の環は、彗星や小惑星、衛星の破片が土星のもつ強力な重力によって砕かれたものと考えられており、そのほとんどは大小さまざまな大きさの氷や岩の粒です。
環には、発見された順にアルファベットで名前がつけられており、A環とB環の間には「カッシーニの空隙」と呼ばれる隙間があります。望遠鏡で見ると、細い線のように見えますが、実際の幅はおよそ4700キロメートルにもおよびます。

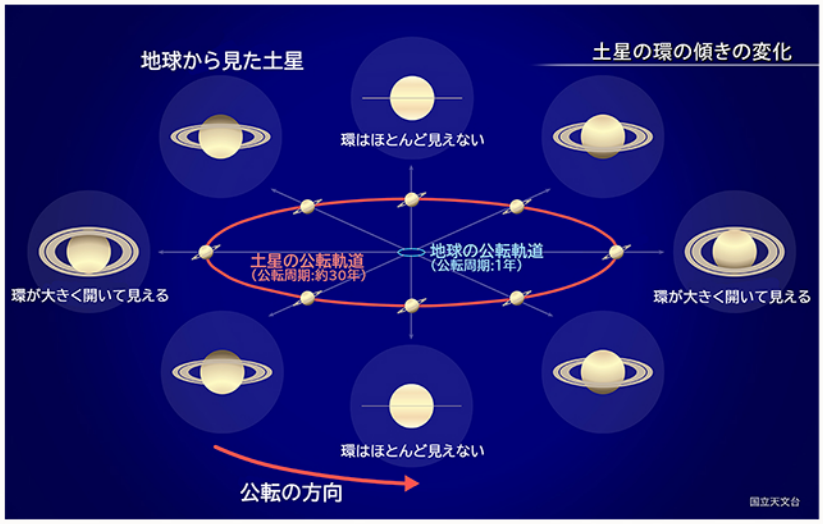


画像：NASA, ESA, A. Simon（GoddardSpaceFlight Center),and M.H.Wong（University of California, Berkeley）

そんな土星の環は、惑星からおよそ28万キロメートルまで広がっていますが、一方で環の厚みはとても薄く、最もはっきり見えるA環やB環でもおよそ1キロメートルと言われています。

土星の環が消える！？

土星の環はおよそ15年周期で傾きが変わっており、その開き方が変化して見えます。2017年ごろに環が最も開いて見えていましたが、2023年は細い楕円形に見えるようになり、2025年には輪を真横から見る形になるため、非常に薄い土星の環は見えなくなります。土星を観察される際は、環の見え方の変化にも注目して観察してみてはいかがでしょうか。



画像：国立天文台

Okasan Digital Dome Theater
神楽洞夢
KAGURA DOME
〒514-0032 三重県津市中央5-20　岡三証券グループ津ビル4階
http://kagura-dome.jp　TEL. 059-221-3121　FAX.059-226-1565